

福田会育児院史研究

家族とともに暮らすことのできない子どもの
暮らしの保障を考える

人間科学部教授
宇都榮子

うと えいこ

日本女子大学文学部社会福祉学科卒業。担当は福祉の社会学。日本の社会福祉史研究を専門としている。細谷啓介氏との共編・解説『上毛孤児院関係資料集成』全5巻＋付録DVD1枚、『福田会のあゆみー明治9年からの歴史を未来へー』社会福祉法人福田会（共同編著）、研究推進のため科学研究費助成事業による助成金を2回得られたのも大きな助けだった。趣味は杖道（じょうどう 直径2.4センチ、長さ128センチの櫓の棒を用いて行う武道）。

「捨子の話」との出会い

1932（昭和7）年8月24日の東日誌上に、河田町二番地先の道路に「ネルの下着に牡丹の花模様のメリンスの単衣を着た生後三週間ばかりの可愛らしい女の子」が捨てられており、警察はこの子を女子医専附属病院に托し、捨子の両親を捜査しているが手掛かりになるものがないという内容で有賀喜左衛門著「捨子の話」（著作集Ⅷ所収）は、始まっています。そして今では捨子は養育院入所ということもあるが、かつては捨子は私たちのいかなる生活事実と関連するだろうかと展開し、親方子方の関係（相互給付組織）を取り結んでの生活保障のありかたに及んでいます。

私は、日本女子大学入学後に、有賀学長が30代半ばに書かれたこの「捨子の話」との出会いを得ました。有賀先生は、社会福祉学科開講の「日本社会史」を担当されており、ご著書『日本の家族』をテキストにされていました。有賀先生のご講義は、受講生である私たちにとって、理解するには難しかったように記憶しています。

ともあれ、有賀先生の「捨子の話」との出会いは、「私たちは、どのようにして生活の安定を得てきた

か、社会的に保障してきたか、その形成過程をたどる」という研究テーマを私に与えてくれました。そして、米地實先生のご指導のもと、「捨子を通してみた子供の生活に関する一考察」という卒業論文を書きました。まえがきには「一般の子どもの社会的地位のあり方の極限の可能性を、捨子という特殊な現象を通して、みていきたいと思う。」と書いています。

上毛孤児院史研究

学部卒業後、日本女子大学の助手に就任しました。一番ヶ瀬康子先生のご指導を受け、社会福祉の歴史研究を目指しました。さらに、一番ヶ瀬先生のご紹介で、社会福祉史研究の第一人者である日本社会事業大学の吉田久一先生のもとで、日本社会福祉史を学びながら、卒論を発展させて、子どもの施設の歴史研究に着手しました。

まずは、群馬県前橋市にある社会福祉法人上毛愛隣社の歴史研究に取り組みました。上毛愛隣社は、1891（明治24）年の濃尾地震の発生を契機に前橋教会の会員であった宮内文作らによって翌年、金子尚男を育児主任として設立された上毛孤児院に始



↑福田会恵愛部（後援組織）長毛利安子と恵愛部員の婦人方、その他関係者と子どもたち（公益社団法人毛利報公会 毛利博物館所蔵写真）



↑福田会のユニット型居室（2014、福田会本体で6ユニット）。右側の引き戸は児童の居室入り口、左側に職員室、左奥が台所、真ん中奥に見えるのがダイニングテーブル

まっています。当時、前橋市で旅館を経営していた宮内は、濃尾地震被災地の被害の甚大さ、特に孤児となった子ども達の生活の悲惨さを旅客より聞き及び、孤児たちの救済を思い立ちます。しかし、既に岡山孤児院長石井十次によって救済が開始されたことを知り、震災孤児ではなく、群馬県下の同じ境遇にある貧児、孤児を救済しようと考えたのです。

そして、上毛孤児院の後身として、上毛愛隣社経営の地行園にその事業は受け継がれています。



福田会育児院史研究

2008（平成20）年より、社会福祉法人福田会（東京都渋谷区広尾）の歴史研究に着手し、研究仲間と共に140年史編纂を目指して研究を進めています。

1876（明治9）年3月、臨済寺住職の今川貞山（後に臨済宗妙心寺派第3代管長）らは、「仏教上慈悲の旨趣に基づき、貧困無告の児女を修養する」として福田会結成を発議し、1879（明治12）年に福田会育児院を設立しました。臨済宗、日蓮宗、天台宗、真言宗、時宗、浄土宗などの仏教諸宗派協同での設立でした。維新期の混乱の中で、生活苦から堕胎・間引き等が行われており、貧困家庭の児童の救済は急務でした。

福田会の名称は、慈悲心をもって貧困者・孤独者・病人などに布施をすれば幸福がもたらされるとの仏教の福田思想に由来しています。

福田会は、キリスト者である石井十次によって設立された岡山孤児院と並び称される育児院でしたが、『福田会沿革畧史』で明らかにされた明治期の活動後の大正・昭和戦前期・戦後期の活動の全容が明らかではありませんでした。

福田会育児院は、1879年の創設以来、2019年で

140年を迎えます。これまで1891年の濃尾震災、1896年の三陸大海嘯による被災児、戦争孤児などを含めて大勢の貧児・孤児の救済を行い、今日では、児童養護施設「広尾フレンズ」、福祉型障害児入所施設「宮代学園」、「広尾グリーンハウス」などの高齢者施設も経営する総合施設となっています。

こうした活動を140年近くにわたって継続できたのは、創設初期に関わった仏教者の救済思想、仏教界あがての財政的支援、経営協力、渋沢栄一（会計監督）などの財界人の支援、公爵夫人毛利安子を部長とする後援組織「恵愛部」（「上流夫人」で構成）による財政的ならびに育児への支援、天皇、皇后からの下賜金、敷地として御料地が貸与されたこと、慈善箱に投げ入れてくれた市井の人々の善意など、様々な支援を得ることができたこと、経営や育児を実施した職員の方々の尽力あつてのことでした。また、機関誌「福田会月報」や、一般紙などによって事業の実際を広報してきたこともあげなければなりません。こうした事実は、福田会所蔵資料や成田山仏教図書館所蔵の福田会機関誌、東京都公文書館や宮内公文書館所蔵の原資料などによって明らかにできました。

資料の検討により、明治の世から今日に至るまで、児童養護施設で暮らす子ども達の生活の背景には、貧困問題が大きく関わっているなあと感じています。今は、児童虐待という大きな問題も抱えており、子ども達に家庭に近い生活の場を提供しようと、ユニット型（児童定員6人）の小規模施設化が推進されています。このことが、子ども達に安心できるくらしの場の提供となることを願ってやみません。

☆児童養護施設は、保護者のいない児童（中略）虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせて退所した者に対する相談その他の自立のための援助を行うことを目的とする施設（児童福祉法第41条）。